

# 「水路上観察」のすすめ

## 暗渠マニアックス

吉村 生  
よしむら なま  
高山英男  
たかやまひでお

### 水路上観察がもたらすもの

「水路上観察」にハマっている。ここでいう水路上とは、かつて川や水路だった場所を指す造語だ。要するに狭義の暗渠である。

「路上観察」をご存じだろうか？それは1970年代から広がりを見せた、身近な路上に溢れる珍妙な風景を発見し面白がる試みであった。これに対し「水路上観察」は、都市の中でも暗渠(川跡)上に対象を絞り、味わおうとするものだ。

例えば、細長い公園。都市河川の一部は高度経済成長期以降埋め立てられ、そのままの形で公園や緑道に転生した。その下には今も下水道として水が流れていて、私達の生活を支えている。

公園というと、形は長方形という先入観はないだろうか。ところが川跡を使った公園は妙に細長く、どこまでも続き、そして時折蛇行しさえする。外観も地図上でも、公園としては異形であり、浮いた存在なのである。よく見れば「玉川上水」や「山谷堀」



【写真1】浅草近くにある山谷堀公園。かつては吉原に向かう客を乗せた猪牙舟も往来した

など、水路の名前が冠されている(写真1)。ああ川の跡だったのかと合点がいけば、当初抱いた違和感は一掃される。街角の違和感が氷解する瞬間は、謎解きのようにたまらない。

ついで、少し歴史を調べてみれば、水と人の物語がそこに存在していることに気付く。今でも川の記憶を持つ人に出会えたなら、お宝級の出来事だ。得た情報を統合し、水路上に立って、プラタモリよろしく脳内でCGを作り、再生する。そんなことをしているうち、あつという間にその土

時の調べ  
Essay

地に愛着が湧き、敬意を抱くようになる。

目の前の何かを、深く識ること。それはどんな街も愛すべき存在に変える、魔法のようなものである。どこにでもある(あった)「水路上」は、最も近所にある媒介かもしれない。

(吉村 生)

## いつもの街に水面を見立てる、水路上観察

すっかり普通の道となっても、もともと川や水路だった場所には水の魂が残っている。その魂の存在を示すものを、私は「水路メモリー」と呼んでいる。

例えば、道端に残された橋の遺構。車道に対してやけに幅の広い歩道。いかにも後から付け足して塗り固めたような、色の違ったアスファルト(写真2)。



【写真2】左半分は水路の跡。かつての水面を偲ぶ「水路メモリー」だ。JR横須賀線北鎌倉駅付近

あるいは、かつてあった水路にちなんで付けられた、「千川通り」「数寄屋橋」など道や交差点の名前。そんな水路メモリーが見つけられ

たなら、たちまち目の前のただの道が「水路上」となることだろう。

さあ、そこからが水路上観察の真骨頂である。岸辺の家々が置く鉢で花咲く植物に、暗渠となつて足元を流れる豊かな水の気配を感じてみよう。人通りの少ない路地にひっそり放置される廃家電などの粗大ゴミ、その周りに吹き溜まるペットボトルやスナック菓子の空袋に、川のよどみを重ねてみよう。水面にカヌーを漕ぎ出したつもりになって、岸辺の擁壁やビルの谷間の空を見上げてみよう。いつもの路上に次々と、あたかも水辺にいるような新しい景色が現れてくるはずだ。

ビジネスは見立てである。世の中を観察して将来の生活者の課題の兆候を読み取り、そのソリューションを見立てる。新しい見立てができた者だけが、ブルーオーシャンを手に入れる。

水路上観察とは、水路メモリーをきっかけにした見慣れた景色の見立て直しである。日頃から水路上観察で「見立て力」を鍛えておくと、きっと皆さんのビジネスにも何かの役に立つ：かもしれない。アスファルトに隠れたブルーオーシャン、いや、青い水面を見つけない行こう。

(高山英男)



### 略歴

暗渠マニアックス

暗渠を偏愛する吉村生・高山英男のユニット。郷土史を中心に細かな情報を積み重ね暗渠をじっくり掘り下げる(吉村)、俯瞰と分類をベースに広く暗渠を捉えていく(高山)、という複合アプローチで著述やイベントを展開中。共著に『まち歩きが楽しくなる水路上観察入門』(KADOKAWA)、『暗渠パラダイス!』(朝日新聞出版)、『暗渠マニアック!』(柏書房)など。

